

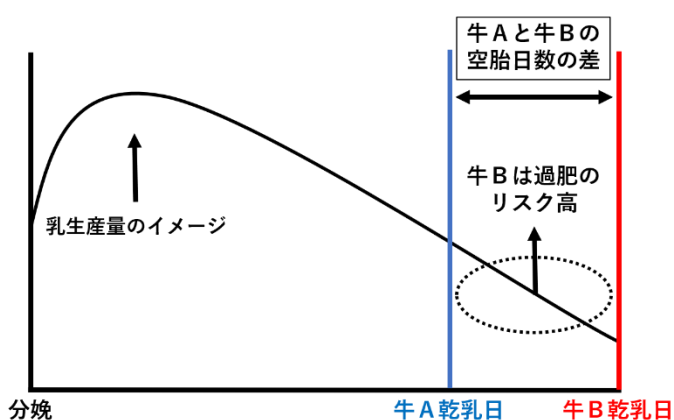
あしよろ・ハードサポート通信

紅葉も始まり、季節はすっかり秋です。秋といえば食欲の秋ですが、この時期は美味しいものをつい食べすぎてしまいますね。牛も秋口から冬にかけては体脂肪を蓄積しやすくなり、太りやすい時期です。今回は過肥の牛とケトーシスの話題です。

◆ 牛はいつ太りやすい？

人間と同じく、要求量以上にエネルギーを摂取すると牛は太ります。

右の図では分娩してから乾乳までの乳生産量のイメージを黒色の曲線、牛Aの乾乳日を青色の軸、牛Bの乾乳日を赤色の軸で示しています。どちらの牛も分娩してから泌乳ピークを迎え、緩やかに泌乳量が低下していきます。その間に授精



が行われて受胎し、次の分娩予定日にしたがって乾乳日を迎えます。この図の場合、牛Aと比べると牛Bは受胎が遅れたので搾乳日数が延長し、牛Aより乳量が落ちてから乾乳することになります。そのため、乳量が低下する＝要求されるエネルギー量が低下する期間が長くなり、牛Bは太りやすくなります。現場でもあまりに乳量が低くなると早期乾乳する場合がありますが、その際も過肥のリスクが高くなります。

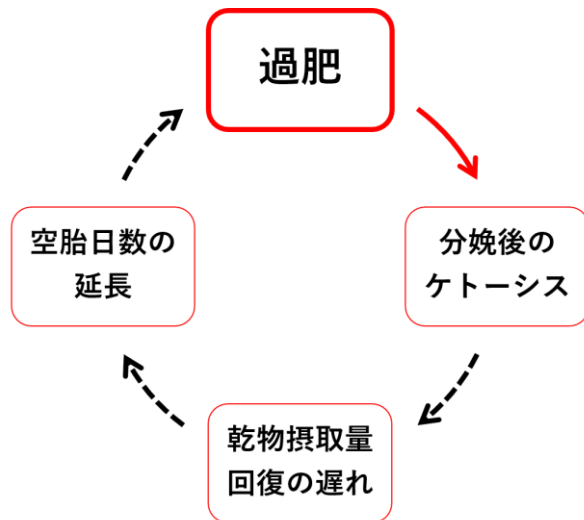
◆ 牛が太ってしまうと？

過肥の牛で一番の心配は、受胎して次の分娩を迎えた際にケトーシスが非常に起こりやすくなることです。過肥の牛は分娩前後の食欲が落ちやすく、体脂肪が動員されます。体脂肪が動員されると更に食欲が落ちるので、結果として肝臓でのケトン体合成量が多くなり、血中ケトン体濃度が上昇してケトーシスになります。重度のケトーシスになった牛は食欲が回復しにくく、乳量が低下して急激に痩せていきます。また第四胃変位や子宮炎など他の周産期疾病や、乳房炎になる可能性も高まります。



◆ 過肥牛と負のスパイラル

前述したように過肥の牛は分娩後のケトーシスのリスクが高くなりますが、悪い影響はそれだけではありません。ケトーシスになった牛は負のエネルギーバランスを引きずったまま乳生産を行います。そのため初回授精の時期になっても子宮の状態が悪かったり、卵巣が動いていなかったりするので、受胎させるまでに時間がかかり空胎日数は延長します。そうすると、分娩後は痩せていても乾乳を迎えるころには再び太ってしまう恐れがあります。



このように、過肥になった牛は次の分娩後に思うように乳生産をできなくなるばかりか、再び過肥の状態で分娩をするという負のスパイラルには落ち込む可能性があります。

◆ 早期発見と早期受胎を

最近では、乳検で乳中ケトン体（BHB）が検査されるようになりました。ケトーシスの牛は尿中や乳中のケトン体濃度が上がるので、特に泌乳初期での潜在性ケトーシスを早期発見できるツールになり得ます。乳検でのBHBは0.13ミリmol/Lを超えると潜在性ケトーシスが疑われるので、該当する牛の状態を確認しましょう。まれにBHBが著しく高くても該当牛を確認するとその時は問題なかったりしますが、のちに重度のケトーシスになってしまう場合がありますので注意が必要です。

		BHB	
		今月	前月
*	0.13	0.08	
	0.10	0.05	
	0.07	0.04	
	0.07	0.06	
	0.09	0.02	

検定日速報のBHB情報

人間でも「肥満は万病のもと」と言われますが、乳牛でも過肥は悪い結果をもたらします。太った牛を「ダイエット」させることは非常に難しいことなので、早めに受胎させて牛が太る前に乾乳し、乾乳後も牛を太らせない飼養管理を行って次の分娩を迎えさせることが理想的です。
(市川雷太)

- ・ 今月行う予定だった第3回「魁！銀河塾」は延期となりました。今後は繁忙期以外での開催を検討していきます。JAあしよろ農産課上原係長による、土壌、肥料、堆肥、草地などをテーマとした勉強会は1月に開催を予定しています。詳細は再度FAXにてご連絡します。
- ・ 11月7日（木）に組勘と肉牛免税をテーマに、第4回「魁！銀河塾」を開催します。講師はJAあしよろ営農部永守課長です。どうぞご参加ください。